# 第一二章　住吉校区

## 第一節　住吉校区の概要

住吉校区は、本市の西部に位置し、校区東部には山稜地が広がっている。校区西部は海に面し、能野(よきの)海水浴場や上能野漁港、下能野漁港、住吉漁港を有する。農地は、校区西部の斜面に整備されている。

深川・里之町・中之町・浜之町・形之山・上能野・下能野・能野里の八集落から構成され、令和五年（二〇二三）十一月末時点の校区人口は、七八七人である。

水平線に沈む夕日が大変美しく、サンセットラインと称する国道沿いだけでなく、高台にも鑑賞スポットが数カ所設置されており、スマートフォンやカメラを携え撮影に訪れる人々が絶えない。

図８－29　住吉校区の位置

サンセットラインから眺めた夕日（古元哲哉氏提供）

# 第二節　住吉校区の成り立ち

「住んで良し、住吉」は校区のキャッチフレーズとして使われている言葉だが、その通り昔から良い土地であることは地名の由来からみても間違いない。

大阪の住吉大社の「住吉」という地名の由来は、次のとおりである。

神功皇后が住吉大神をお祀りされる際、それに相応しい土地をあちこちと探したが、この地を見つけた時に、「真住吉」との託宣を得られた。よってこの地を住吉と名づけて鎮座した。この「住吉」はスミヨシと読むが、古くは「スミノエ」と読み、スミノエの「エ」とは、今でも関西圏では、良い事を「ええ」（良い）というのと同じで、神さまが住むのに良いという意味となる。神さまの御心にかなう土地ということで住吉という。また、住吉大神は祓の神さまでもあり、昔の住吉の海岸は水が美しかった。まさに「澄み良し」という意味もある。

住吉という地名については、『津国風土記』に「住吉大神現れたまひて天下をめぐり住むべき国を充たまふに、沼名椋長峡（神功皇后）の前に到り、これぞ真に住むべき国なりとて讃めたまふて、真住吉と称じ御社を定む。今の俗これを略してただ須美乃叡といふ」とあり、また『住吉勘文』には「住吉と号くる事は、真澄鏡より出でてまことにすみきよしといふ義なり。これ真住吉の始めなり。住吉は水なり。日の光清く潔きを、水に譬ふる御事なり」とある。『天保年間の摂津国絵図』の注釈には「住吉をすみの江とよむ事、古人の例にて『万葉』および古書にその例多し。近江の日吉も『古事記』にはひえとあり。すべて吉の字をえとよみてもよき事にもなるなり。上とえとは相通にて、よい日和、えい日よりといふても同じ事なり」と記されている。

住吉神社に祀られる住吉大神は、底筒男命、中筒男命、表筒男命といわれる三柱の神で、お祓い・航海安全・和歌の道・産業育成などの守護をなされる神である。

『古事記』によれば、イザナギノミコトが亡き愛妻イザナミノミコトを追いかけて、黄泉国（死者の国）にまで行ったが、妻を連れ戻すことはできず、地上へと帰ることになった。地上に戻ったものの、その身には黄泉国のケガレを受けていたので、海に入って禊を行う。これを行った時に住吉三神がお生まれになったという。よって住吉三神は「海の神」「おはらいの神」として崇敬されることになる。

また「筒」という名称については、弥生時代にはすでに始まっていたと考えられる製鉄に関係しており、初期の製鉄では、水溶性の鉄分が葦の根元に付着した、褐鉄鉱（水酸化鉄）の塊を利用していた。葦に付着した褐鉄鉱は、葦の根や茎が枯死すると、球状や多くは管状の塊になって残る。この形状が「筒」であり、筒男三神は製鉄に関連する神様なのではないかという解釈もある。

住吉という地名は全国に多くあるが、もれなく住吉三神を祀っており、それにふさわしい住み良い澄んだ地が選ばれている。全国に約二三〇〇社余りある住吉神社の一つがこの校区にも祀られている。住吉という名にふさわしい土地として選ばれたのである。

## 「神社縁起書」の考察

森の峰上妻家住宅資料（鉄砲館蔵）に、昭和七年（一九三二）八月十八日、住吉神社拝殿改築のため奉斎（寄付）を依頼した文書に添えられた「神社縁起」（上妻隆代筆）がある。

住吉神社縁起　当神社の創立は元禄七年にして、島主かつて摂州住吉神社に詣で、その祭神は武運長久海上安全の守護神に在すを聞き大に之を尊崇して領土守護のため我領土に勧請せんと欲し、分霊の式を挙げ神鏡を奉持して帰り、海浜に接し風光に富み且つ神聖なる地域に社殿を営みて奉斎せられたりと言う、故に鎮守の地を擬して住吉と称するに至れりと。

同年に記された『住吉神社由緒』（昭和七年神社明細書　上妻宗寛筆　住吉神社蔵）では島主名も明記され、さらに文言が追加されている。

当神社の創立は元禄七年にして、旧島主十八代種子島久時氏嘗て摂州住吉神社に詣し、当神社の祭神は武運長久海上安全の守護神なるを聞き大に尊崇し、領土守護の為め之を我領地に勧請せんと欲し、宮司に分霊の式を賜はんことを乞ふ、宮司其の擧を賛し諾して分霊の式を受け神鏡一を給ふ、島主大に喜び神鏡を奉持して帰り、家宰に命して海浜に接し風光に富み且つ神聖なる霊境を物色せしむ、家宰巡視するに乃ち当社の在る所、後に丘陵を抱え前は海に濱して樹木鬱蒼頗る神明の舎に適したるを認め復命して当所に社殿を営みんと言う、故に此の地を住吉と号するに至れり。降りて明治初年、種子島地頭平山季雄、部内の諸祠を案検するに当社の祭神は正確なるを認め村社の列に入れ氏子信徒をして益々畏敬尊崇せしむるに至れり。

住吉三神が勧請され神社が建立されたので住吉という地名になったということは間違いないのだろうが、元禄七年（一六九四）という年代については疑問がある。

『種子島家譜』において「住吉」という地名の初出は天正七年（一五七九）十月「時に克時、住吉（時堯の旧宅）に在り」の一文。克時は一六代久時の幼名である。勧請した一八代久時の祖父が若年のとき住んでいたのが住吉ということになり矛盾している。地名を時代に適用して補足したとしても、第一次家譜編纂が延宝元年（一六七三）であるため、こちらもつじつまが合わない。となると、住吉神社はもっと以前に創立されていたということではないかと考えることができる。一四代種子島時堯の旧宅が住吉にあったということから、一五〇〇年代以前の可能性がある。

鹿児島県内には住吉神社は九社あり、いずれも海浜に面した土地で、その鎮座地名も住吉という。だが創立は多くが「不明、古代、往古」とされ、明記されているものは、出水市高尾野町の島津忠久建立とされる建久七年（一一九六）、姶良市住吉の和銅元年（七〇八）、大島郡喜界町の建仁二年（一二〇二）。種子島の元禄七年（一六九四）は、ほかと比べるとかなり浅い歴史となる。

残存する「住吉神社縁起」の中で最も古いものは明治十年（一八七七）に記されたものだが、そこには「いつ、誰が奉斎しはじめたのかわからない、口碑にも無い」と記されている。

住吉神社縁起

古事記云

伊邪那岐大神詔。吾は（中略）此三柱神は墨ノ江之三前之大神也。

（中略）

御神詠

もとよりも　われはうきたる海の上　波風たたは祈れ船人

今此所にしずまりませるか　いずれの年　いずれの人か斎はじめ奉るをしらず　旧主廿一代　久芳公信心深くましまして　宮柱太敷建はじめ給ひけりとぞ　万のかみ定め事ちいさきほこらにて　斎奉りけるか　その故よしは　里人の口碑にも残らず　ふるを尋るに　便り無に成にたり

御社は府下を去る事　わずかに三里　往来のいと安ければ　老るは杖により以はけなきぞ　手を引れ詣める人絶え間なく　柏手の聲山彦こたえて賑わしく　霊験いちじるしく　諺にも　神明の御稜威も　人によりてあらはるるとかや　御社の辺りぞ　千年ふる　松も空を凌ぎ顕れ給ひし塩路は目の前に　よせくる浪は白ゆふ巌に掛り　見るめ清々しく　はふり子が木綿襷千代掛て　大御代は更なり　旧主家ぞゆかり覚あれば御家長久万の青人草と栄行かむ事を祈り奉る真心をみそなわして守らせ給ふ

思ふに邑を住吉と名付け　浦をも住吉浦と唱来れは　これぞ古へより斎奉りし験ぞとは思へるなめり　こたひ此由来をかい付て　後の世にも伝へる本としぞ　美座江山戸長役付筆記役下村源次時直耕作掛長長野喜兵衛松下良太郎深田慶三上妻休右衛門鮫島喜左衛門同氏仙太郎等の需めに応し拙き筆に紀し置伝るをしりこふ

旹明治十年丁巳十二月良辰　田上青山謹紀

住吉神社祠掌　上妻直代宗清

為後年誌之

明治十年丁巳十二月十五日　七十五歳　田上青山

一部表記の間違いがあり、明治十年の干支は「丁丑」である。住吉神社祠掌（宮司）上妻直代宗清はおそらく宗晴と書こうとして晴と清を間違えたのか、正しくは「宗春」である。

二一代種子島久芳については、『神社沿革誌』に「石灯籠及び狛犬献上　寛政元（一七八九）年」とあるので、このことを

記したものであろう。その時に社殿を改築したと思われる。

　では、昭和七年に記載された「元禄七年（一六九四）」とはどこから来たのか。昭和七年に書かれた由緒は、明治時代の社格決定の際に苦肉の策として捻出された可能性がある。明治の初め、神道を国教とせんと神祇庁が設置され、全国で廃仏毀釈と神社の社格認定が進められた。社格認定には、多くの提出しなければならない書類があり、その中に神社明細書と由緒が必須であった。そこで、残された資料と伝聞をつなぎ合わせて、『種子島家譜』との矛盾点を鑑みる間もなく、「住吉神社明細書」は提出されたのではないか。

　住吉神社は明治三十九年勅令第九六号により神饌幣帛料を得るべき神社に指定された。村社と認定されたのである。

　昭和七年の明細書には「明治初年村社に認め」とあるが、ここにも齟齬が見受けられる。

　近代社格制度は、明治維新以降、平安時代に書かれた『延喜式』に倣（なら）って、新たに神社を等級化した制度である。第二次世界大戦後の神道指令により廃止されたが、現在もなお「旧社格」などの名称で神社の格を表す目安とされる。奉幣がどこからなされるかを定めたもので、官社・国社・府県社・郷社・村社とあり、それぞれ官（国の中央、神祇官）・国（地方官）・県・郡・村から祭典の際に幣帛（へいはく）が納められた。社格を認められることは大変な名誉であり、神社運営にも大きく影響した。

　種子島で住吉三神を祀る社は由緒より前に存在していたのだろうが、頼みの綱である『種子島家譜』に明確な記載がない。根拠もなしに「十八代久時公が大阪の住吉神社を詣で神鏡を奉斎した」という史実を創作することはないだろうから、何かしらの証拠となる史料があったと考えられる。明治四十二年の神社明細書に「宝物　神鏡　一」とある。この神鏡に「元禄七年十八代　久時」などの銘や書付が備えてあったのかもしれない。元禄七年一八代久時が江戸からの帰りに大阪の住吉神社を詣で、「住吉」の由来を聞き感銘を受け、御稜威を高めようと本宗から神鏡を賜り、もともと住吉三神を祀っていた種子島の住吉という土地にこの神鏡を納め、社殿を改めたというのが事の顛末ではなかろうか。その神鏡の存在はご神体とともに本殿に納められているため現在確認できない。推測の域を出ないため、昭和二十七年の宗教法人登記簿に記されている由緒のとおり「元禄七年創立」と伝えていくことになる。

　明治十年の「神社縁起」を意訳する。

　御神詠

もとよりも　われはうきたる海の上　波風たたは祈れ船人

今ここに鎮まりませる神、いつ誰が奉り始めたか解らないが、二十一代種子島久芳公は信心深く、社殿を立派に建て替えられた。元は小さい祠であったらしいが、その起源は里人の口碑にも残っておらず、古（いにしえ）の事を調べてみてもわからない。このお社は西之表から約十二キロメートル、往来がとても便利で老人も杖をついて行く。参拝人

は絶え間なく、柏手（かしわで）の音にやまびこも答えて賑わしい。霊験著しく諺にも「神明の御稜威（みいつ）も人によりてあらはるる」と言われるとかなんとか。御社の周辺は、悠久の時を松が空を突き抜けんばかりに繁り、海流は目の前、寄せ来る浪は白い木綿のように岩場に掛って清々しい。神主が正装して天皇家の弥栄を祈ることは勿論、旧主家である種子島家に縁があるとのことであれば、御家長久、島の全ての皆々と栄える事を祈り奉る、その真心を御覧になり守護神となってくださった。この土地を住吉と名付け、浦を住吉浦と呼んで来たのは、これこそ古より奉斎してきた「しるし」なのではないか。この度この由来を書き、後世に伝える本（もと）としてほしい。美座江山戸長、役付筆記役・下村源次時直、耕作係長・長野喜兵衛、松下良太郎、深田慶三、上妻休右衛門、鮫島喜左衛門、鮫島仙太郎たちの求めに応じて、つたない筆だが記しておき、伝承されていくことを願う。

年月日：明治十年十二月良き時に　田上青山謹んで紀す

　住吉神社宮司　上妻直代宗春

後年のためにこれを記す

明治十年十二月十五日　田上青山　七十五歳

## 住吉小学校

「眺めよし　人も亦よし住吉の学びの庭も栄えゆくらん」

旧正門前の石碑に刻まれている言葉である。令和五年をもって創立一四四年という長い歴史を誇る住吉小学校は、住吉の人間にとって昔も今も大切な場所であり、校区の軸となっている。標高二〇メートル、城（じょう）の山の上に建ち、昔は校内で一番高いところを望ヶ丘（のぞみがおか）と呼んでいたそうだ。住吉を一望できる見晴らし台からの眺めは壮大で、夕陽で染まる空と海は郷愁を誘い、懐かしく温かい気持ちにさせられる。『創立百周年記念誌』に寄せられた卒業生たちの思い出に多く登場するのは「ガジュマルの木」である。登ったり涼んだり、小学生が肌で親しんできた老樹は平成十八年（二〇〇六）、惜しむらくも切り倒された。その大木の存在を後世に伝えるために見晴台に説明パネルが建てられている。

創立百周年記念碑

### ガジュマルの大木

ここ住吉小学校一帯は、城（ジョウ）の山といい、かつて代官上妻氏の居館があったと伝えられる。その後、鉄砲伝来当時の殿様「時堯公」もここにしばらく居を構えたと

ガジュマルの大木跡に立てられた説明パネル

いう由緒ある場所である。ここには樹齢一四〇年から一五〇年のガジュマルの大木があり、住吉小学校のシンボルとして、創立から今日まで住吉小学校の歴史と児童を温かく見守り続けてきた。

亜熱帯のクワ科植物のガジュマルには、防風・防潮・護岸の効用があるとして、江戸時代から明治時代にかけて琉球貿易の折、先祖たちが住吉港周辺に琉球から移植した。そのとき、この地にも移植されたと思われる。

この大木も平成十七年イチジクヒトリモドキの大量発生と老木のため枯れ始め、学校下の住宅にも被害を及ぼす危険性があり、やむなく平成十八年八月に伐採するに至った。

住吉小学校のガジュマルの大木を後世に継ぐためにこれを立てる。

平成十九年六月　西之表市立住吉小学校・西之表市教育委員会

## なかよし相撲

毎年五月に、中種子町立星原小学校と合同でなかよし相撲大会が開かれる。種子島の西海岸の市町の境をはさんでの隣同士、昔から交流が深かった。令和元年に第八八回を迎えた伝統行事である。

『住吉小学校沿革誌』に「昭和七年六月七日　牧川平田原にて星原校と相撲試合をなし尋五を除き外全級大勝」と始まりが記録されている。その後「昭和十七年度　久しく中断され居たる星原校との対抗相撲を本年より復活し牧川海岸に於いて盛大に敢行せり」と復活をみせ、「昭和三十二年七月四日　五月実施予定の住吉小中対星原小中児童生徒なかよし相撲大会」で

なかよし相撲の様子

「なかよし相撲」の名称が初めて出てくる。開催場所は互いの中間地点である深川、牧川だったが、校庭に土俵を建設し、昭和五十年代には一年交替で互いの学校を訪問し合う形式となった。毎年五月になると相撲の特訓が始まり、本番では白熱した勝負が繰り広げられる。

**年　表**

**明　治**

元　年　廃寺となった本成寺の家屋を利用し学問所を開く

五　年　太政官より学問の普及奨励の件の布告有り、八月学制公布

六　年　西之表第七十三郷校という公立の学校設置

八　年　学問所を改めて第七十三郷校、住吉支校と称す

十二年　一月、正則住吉小学校と称する、この後毎年一月九日を以て本校創立の記念日とする

二十年　四月、小学校教則改正により簡易科小学校と改称する

三十四年　九月、住吉尋常高等小学校と改称する。（四学級）

四十一年　四月、小学校令改正により住吉尋常小学校と改称する

**昭　和**

八　年　四月、校旗制定（東郷平八郎元帥揮毫）

九　年　校歌制定

十六年　国民学校令発布により小学校を廃し国民学校とする

二十二年　三月、学校改革により、住吉小学校と改称する

三十四年　十一月、給食室が完成し、完全給食が始まる

四十一年　三月、県学校保健準優良校に選ばれる

四十二年　一月、県学校緑化コンクール優良校に選ばれる

四十四年　二月、県給食教育準優良校に選ばれる

四十四年　三月、歌碑を建設する

四十六年　五月、制服を制定する

五十三年　十月、創立一〇〇周年記念碑を建立、国旗掲揚台、校門道整備

五十四年　一月、創立一〇〇周年記念式典挙行

五十八年　三月、体育館を新築する

五十八年　十月、相撲道場を新築する

**平　成**

元　年　十一月、県「山坂達者」実践推進校研究公開を行う

七　年　七月、第三回赤尾木湾横断遠泳大会に参加する

八　年　九月、第一回小・中・校区合同大運動会を住吉中にて開催

九　年　三月、新校舎落成（鉄筋コンクリート三階建て）

十一年　十二月、相撲道場を移転・改築

十二年　五月、プールを建設、竣工式・祝賀会を行う

十四年　四月、西之表市学校給食センター「のびっこ」給食供用開始
十五年　四月、特認校制度導入（榕城小校区より二人入学）
十五年　八月、校内ＬＡＮ設置
二十三年　五月、第八〇回仲良し相撲大会開催
二十六年　二月、涼み台敷設工事完了
二十七年　五月、戦後七〇周年疎開先伊佐市立本城小学校との交流
二十八年　十一月、再生可能エネルギー設備（風力・太陽光）設置
三十年　三月、屋外トイレ竣工
三十年　九月、創立百四〇周年記念住吉小学校・校区合同大運動会

**令和**

元年　十一月、市研究協力校　研究公開を行う（算数科）
二年　十一月、普通教室空調設備設置
二年　三月、校内無線ＬＡＮ工事（一人一台タブレット整備）
三年　四月、親子留学受け入れ（岐阜県より二人）
三年　十二月、西之表市人権教育研修会（本校）

## 住吉中学校

住吉中学校は、昭和二十二年に住吉小学校内の三教室で開校、翌二十三年に形之山の競馬場跡地に新校舎を建て、十月五日を創立記念日とした。以来六二年間、二五〇〇人近くの卒業生を送り出したが、平成二十一年閉校した。

多くの卒業生の記憶に残るのは、正門前にある急坂である。中には自転車で駆け上った強者もいたそうだ。

正門前坂（昭和32年）

現在はその坂の横に「さくら保育園」が設けられている。閉校後はせいざん病院となっているが、体育館などの一部の施設は残っており、そのまま利用されているものもある。

浜之町出身の深田悟氏の著書『思い出―種子島に生まれ育って（昭和27年頃～38年3月）』に、昭和三、四十年代の住吉中学校の様子が詳細に書かれているので転載する。

### 中学校期の思い出

校舎

急な坂道を上って正門から右手（東側）、運動場側の木立林と花壇の間の通路を進むと、玄関口の木造母屋校舎①

（右側に職員室と校長室、左側に1教室）、その奥に、古くて長い木造高床式の本校舎②（右側に音楽室と2教室、左側に3教室）、そして宿直室があった。これらの建物はセメント地・屋根付きの渡り廊下で結ばれ、本校社の前後は階段になっていた。宿直室の右手奥には、本校舎②に平行して新しい鉄筋コンクリート製の建物が並び、理科準備室、調理室と家庭科室があった。家庭科室は広い和室で、全体集会によく使われた。

二つの渡し廊下を繋ぐ本校舎廊下の右側（南東側）には売店があり、三年生か二年生の女子が店番をしていた（文房具の他にパンが売られていた）。本校舎の北西側端に倉庫（体育用具室）、両端側にはそれぞれ離れてトイレがあった。本校舎には入り口が両端と渡し廊下の他に、それらの間に二つと計六つあり、間の二つの入り口にはコンクリート製の四角い水タンクが備えられていた。

建物の間と、宿直室裏の本校舎②北東側の空き地などには花園があり、よく整備されて季節に応じた花が彩っていた。

水道は既設。水は学校から形之山へ下る十字路の手前の右側、道下の谷間からポンプで汲み上げていた（エンジン一式が置かれていた）。この谷と学校の裏庭との間に教職員住宅があり、浄水塔とコンクリート製の大きな貯水タンクが校長住宅と本校裏庭との間にあった。その近くに形之山・能野方面からの、運動場の西側に浜之町方面からの登下校口があった。

**運動場・校庭**

運動場は粘土質の地盤で広かった。二百メートルのトラックがあり、その北西側は百メートルの直線コースに利用できた。校舎近く、第一・第二コーナーの円弧部の内側は芝生地で梅檀の小木一本があり、休み時間に寝転んだり、相撲を取って遊んだり、ベンチもあったりしての憩いの場だった。南西側の第三・四コーナーの内側には鉄棒と砂場があっ

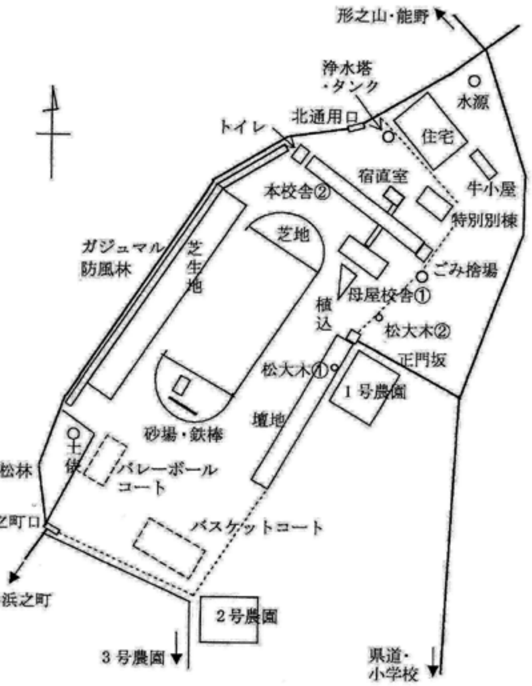



図８－30　住吉中学校概略図

第23回卒業生（昭和44年度1組）

第23回卒業生（昭和44年度2組）

昭和44年度卒業生

た。浜之町に近い南西側はバレーボールとバスケットボールのコートに利用されていた。

北西側にはガジュマルの防風林があり、トイレの汲み取りを肥料にして育っていた。防風林と運動場の間は幅広い、長い芝生地だった。南西側（浜之町側）には松林、その中に土俵があった。南東側縁（正門の左手側）には少し高い段地になっていた。東側には松の大木が数本生えていた。最も大きい正門南側の木には、運動会時に小旗を吊した縄を取り付け、運動場隅の数か所に向けて張った。玄関前の木立林にはソフトボール時、浅いレフト打球が度々飛び込み、凡フライでも安打になった。

H20年度撮影

S35年度撮影

中学校校舎

生徒数は昭和三十年代後半から四十年代前半にピークを迎え、その後平成に入ると一気に減少した。最も卒業生が多かったのは昭和四十四年で、二クラスあり、八五人であった。

少子化・過疎化が進み、住吉中学校が閉校し、本市内の中学校を統合して種子島中学校となったことはやむを得な

H4年度撮影

源太郎踊の担い手だった中学生

いとはいえ、深刻な問題が残った。郷土芸能である源太郎踊の継承である。住吉中学校では源太郎踊の会得を夏休みの課題とし、地域住民、教職員も一緒になって取り組み、秋の運動会で披露することで長年伝承を続けてきた。平成五年には市民体育祭でも公開されるなど、住吉の郷土芸能伝承の場として住吉中学校は要だったのである。今後どのように継承していくのか、悩ましくも大きな課題である。

## 第三節　地名・字名

### 大字住吉の小字一覧

二ツ川、柏木、串之山、蛭原、舞床、立切、高松、大平、松小田、野別府、諸木、大町、揩木原、蕨田代、中峰、下牧内、須ノ木元、上牧内、大嵐、大比良美、上大久保、円碩、上園、下園、西之原、番屋平、上塩屋、松原口、中之割、川頭、高峰、塩木小田、下塩屋、能野迎、頬桁、河嵐、下ノ平、門ノ下、下塩屋牧、四坊山、馬乗場、頭平津川原、小中峰、上石垣、中石垣、下石垣、馬子ヶ廻、松中峰、下平津川原、猿小田、大石田、黒石、下葉山田、上葉山田、莞之淵、赤坂、上形山、下口、下形山、中形山、溜池、小牧山、阿保松山、名残山、火立峰、斗岬、浜之上、吹上、新田、田上山、榕之桁、中之桁、住吉田、馬毛田、舞田、馬場隅、城之山、田代、味方原、梅屋敷、後口田、信多野、千草野、轟、東ノ俣、弐反野、郡川、平原、頭釼山、桜原、冠野、弥五郎嵐、構園、隅之嵐、冠嶽、川曲、小倉山、桑園、真野、馬込、中園、前園、中目、前田、園田、大川原、宮野、須之木原、辻峰、豊之原、御山、小宮田、向崎、仏峰、下辻畑、渡瀬山、上長野、柳野、黒岩、飯高、塩尻、壁石、経ヶ崎、涼之松、一ツ氏、中初瀬、狩俣山、益原、重松、下長野、馬与へ、中辻畑、上辻畑、馬縊り、下小田添、上小田添、大多尾、小倉野、大道山、大谷、下大谷、下横野、上横野、鹿

供養、青野原、上籔田尾、南回谷、仏中、星ヶ崎、上堂上、水溜、中籔田尾、下籔田尾、小谷、見当、中堂ノ上、下堂ノ上、御開、御山添、中原、大開、小池、園之平、黒野平、田中野、上長野、惣五郎、次郎渡、二俣松、堂ノ林、下大道山、西之崎、松林、長峰尾、上高峰、榕田代、大畠、中畠、村之園、大園、深川口、坂之下、渡口、佐保、射場ノ元、中野、野田、園ノ多尾、野田多尾、下高峰、須田ノ田尾、上渡口、幾峰、平田、豊年作、駒之瀬、大馬之瀬、上門之下、門之下、下野崎、猿喰、釜司小場、根堀、矢引谷、樫木元、丸之小田、宮田、払山、下門之元、追落、廻峰山、幾良野、頭那志、中嶋

## 第四節　歴史的特殊性

### 一　時堯公居住跡と住吉という土地

住吉小学校の建つ地は城の山（じょうやま）と呼ばれている。「城の山」をそのまま「しろのやま」と解するならば城があった山だが、城の山にあったのは見張り台であり、種子島家のお屋敷があったのは里之町の「前園」だと伝えられている。かつて行われた調査では「城の山」「前園」ともに城趾として同等の規模と構造を有しており、両城館趾は密接不可分の関係にあることが判明した。本城・支城の関係にあることはわかったが、どちらが本城であるかまでは不明のままである。ただ、地元の古老によれば、江戸時代に種子島家が中種子・南種子へと向かう際に宿泊したのは前園の館とのことだった。

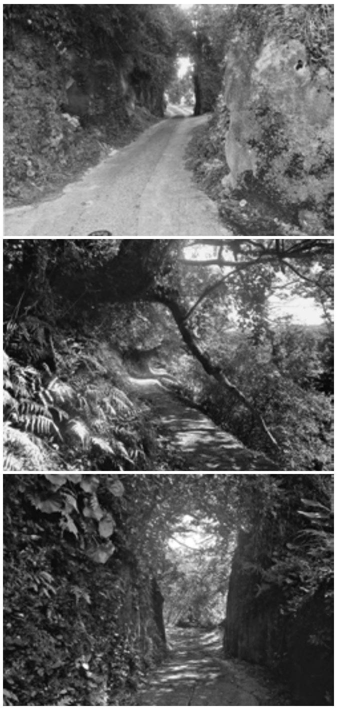
地形的に見ても、前園が本丸で城の山は海に面した二の丸的な役割を担っているように思う。

里之町前園の切通

城の山の麓を流れる浜

之町川をさかのぼると、港から城の山の裏側を通り、里之町まで続く。かなり奥深くまで船を入れることができるため、赤尾木港が築港されるまでは、台風の際に種子島の船のみならず、本土の船も住吉港に避難してきていたという。近代に入っても避難のために住吉港を利用する船は多かった。

　里之町・前園であるが種子島家の居留地があったというよりも、そのまま城として造られているようにみえる。切り通しと三叉路で造成された土地は、太平洋戦争時に防空壕が掘られ、住吉の人々を守った。江戸時代末期から明治にかけて名を馳せた長野金兵衛という豪商を生んだのも里之町である（金兵衛への借用書は数多く残され、金兵衛の土地所有は種子島全土にわたる）。



里之町前園の切通

　里之町に通じる能野の農地では土師器（はじき）が出土している。土師器とは、弥生土器の流れを汲み、古墳時代から奈良・平安時代まで生産され、中世・近世のかわらけ（土師質土器）・焙烙（ほうろく）に取って代わられるまで生産された素焼きの土器である。これは古代に住吉が中央と関わりがあったという証拠であり、実は住吉は国府だったのではないかという可能性も出てきた。

　住吉という土地は種子島の中心より少し北に位置して西側に出っ張っている。種子島の北にも南にもさらには東海岸にも便が良い。そこには見晴らしの良い山があり、その下には良い入り江を持つ良い港があり、自然災害にも強い。『種子島家譜』には多くの災害の記録があるが、住吉の災害記録は比較的少なく災害規模も小さい。

　上妻氏は種子島家が来島した後、住吉村を下賜されたとあるが（明治三十年　春日山八幡神社　社掌徳永

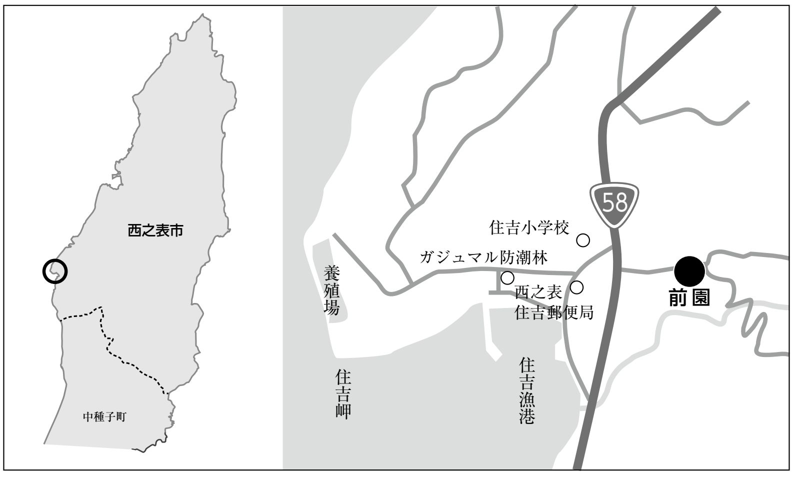



図８－31　前園の位置

形之山ゾウ化石

鉄製釣針

祐雅　奉奐「上妻家系図写」)、もともと拠点として居住していたのではないだろうか。のちには住吉の居城を種子島家に譲り、中種子東海岸の増田の土地に山城を築き、さらには南種子の要所である島間にも地形を利用した見事な城を築いた(この順序には諸説有り)。要所を押さえた素晴らしい立ち回りである。

この島を一番良く把握していた上妻氏に譲られた住吉の居住地で、種子島家は大事な跡取りを生育した。城の山は十四代時堯の旧宅とされ、一六代久時は家を継ぐまで住吉に暮らしていた。嗣子を護る安全な良地であったことは明らかである。

住吉が太古より地形と自然に恵まれていたことは、形之山にて発見されたニシノオモテゾウの化石や、数多く発見されている石器類、上能野貝塚から出土した島内最古の鉄製品である釣針などが証明している。

『種子島家譜』に「文化二年(一八〇五)八月　米五包を住吉村に与ふ、今茲(ことし)大いに飢労して一島の人民みな救を求む、住吉村も亦飢う、然れども府庫の虚耗を想ひ、相共に草根を食して、救を請はず、ゆゑに其の篤実を賞するなり、」とある。

前年の相次ぐ台風、旱魃、蝗害(こうがい)によって、島民は蘇鉄を食べて飢えをしのぐほどの大飢饉に陥っていた。しかし住吉の人々は皆我慢して救済を辞退した、その立派な行いに褒賞を頂いたという記述である。しかし、「住吉村も亦飢う」と「相共に草根を食して」の部分は脚色かと思う。住吉村はそれほど飢えておらず、余裕があったので特に救済の申請はしなかった、と読めてしまう(もちろん、御役人が巡回して被害状況は住吉も確認しているので、それなりの飢饉があったのは事実だ)。

住吉の古老を例えるのに「のんきなひと」という言葉を多く聞く。のんき=暢気=呑気で、性格がのんびりしているさまを意味する。物事にとんちゃくしないさま。この地に生まれ育った住吉の人間は、とても大らかに生きてきたのだろう。

戦前戦後を通じて種子島全土で「ひもじい思いをした」「とにかく貧乏だった」という苦労話はたくさん聞くが、「でも幸せだった、楽しかった」という幼少期の思い出を、記念誌などで語るのは住吉の子どもだった人たちだ。現在は過疎化で不便になっているかもしれないが、昭和三十年代には商店が立ち並び、映画館までも擁した中之町を「まち」と呼び、住吉内で全てが事足りていた時代があった。「住吉魂」という言葉を中学

校のスローガンとして、「誠」を小学校の校訓としてきた、誠に誇れる「ふるさと」なのである。

## 二　能　野　焼

能野焼は、住吉能野で明治三十五年まで作られていた陶器である。種子島特有の砂鉄を多く含んだ粘土を用い、壺・甕（かめ）・食器・花器・仏具・動物像・しびん・墓など、島内で使用するありとあらゆる器種を作っていたのが特徴である。

どっしりとした男性的な力強さと、生活に根差した素朴さを持ち、昭和四十年頃の民芸ブームで注目された。その始まりは定かではないが、享保十一年（一七二六）と線刻された大甕が存在したことから、少なくともこの時期には窯が開かれていたと考えられる。制作技法や器形などから、南方系（琉球・東南アジア）と朝鮮系、両方の影響を受けていると言われているが、影響を受けた時期・経緯等は不明である。

能野焼にどのようにして朝鮮系の技術が伝わったのかについては諸説あるが、以下の三つが有力とされている。

一　秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）の際、島津家家臣として出陣した一六代島主・種子島久時が、朝鮮人陶工を直接連れ帰った説

二　島津家が朝鮮出兵の時に連れ帰った陶工が、琉球へ焼き物指導に行った帰り、種子島へ立ち寄った（あるいは漂着した）説

三　享保十六年、島津家が陶業保護を打ち切った際に、苗代川から陶工が移り住んだ説

能野焼は武骨で男性的なイメージだが、中には装飾に工夫を凝らしたものもあり、当時の陶工が自由な発想で「美」を表現した痕跡が見られる。

### 代表作品

**二重透かし**

能野焼の装飾における最上級の技法が『二重透かし』と言えるだろう。現存するものは三点のみとされ、そのうち一点は市指定有形文化財になっている。この技法は、現在には伝承されておらず、秘法とされている。

**貼付文**

型抜きした梅の花や粘土紐などを貼り付けて、模様を描き出しており、梅が最も多く作られているが、ほかにも唐草牡丹

花形透し彫花生（市指定文化財）

貼付文による花瓶

線刻文による甕

ソテツを模した花瓶

や雲龍なども存在した。

**線刻文（釘彫り）**

陶工たちの最も自由な発想で施された装飾が線刻文と言え、文字を彫り込む場合もある。

**立体造形**

ソテツや竹筒等を表現しながら、花立としての機能を持たせたものと、動物像やかまどの神様等、純粋に像として制作されたものがある。竹筒を模した花器は、苗代川系の中にもよく見られるが、ソテツを模したものは能野焼独特の意匠である。

**能野焼窯跡**

かつて行われた聞き取り調査では、「その昔、一代の陶工が苗代川より渡島し、今の住吉能野に窯を築き、地元の人々を使役して焼物を始めた」という証言もあった。また、能野には「陶技を伝えてくれた朝鮮人の墓」と言い伝えられる墓も存在している。

能野焼窯跡は、昭和五十年に市の文化財（史跡）に指定されている。明治三十五年に廃窯になった後、昭和十二年頃、薩摩焼の有山長太郎（初代）が、能野に第二長太郎窯を計画したが、当時の不安定な情勢や長太郎の急死などにより実現しなかった。

現在の能野海水浴場の一連の砂浜を、長太郎を崇敬して長太郎浜と名付けて呼んでいたことはあまり知られていない。

現在は、一見すると当時の面影はないように見えるが、タブの木の根元には今でも「ツボの神様」と呼ばれる陶器の祠が祀られ、祠の横には、赤く焼けた石や陶器の破片、焼けた粘土の塊等が多数埋もれている（浦添　一九八〇）。

ツボの神様

祠周辺の陶器の破片

## 野間焼のカメ墓と能野焼の甕棺

能野焼は生活用具をはじめ、ありとあらゆるものを作り出していたが、埋葬に関するものも作陶していた。

中種子町野間で焼かれた野間焼のカメ墓は昭和三十五年頃に、六基が確認されている。これらは、能野で陶芸の修業をした石堂八兵衛門という人物が制作したと言われていて、民俗学者である下野敏見は、八兵衛門が独自に能野焼の陶墓を発展させて制作した物ではないかと推察している。

能野焼製の甕棺は能野焼窯元の先祖の墓に多く見られた。亡くなった人の遺体を中に入れて墓地に埋葬するための甕棺（座棺）で、大甕の上にすり鉢型の蓋をして使用する。窯印の近くに数字が手彫りされているが、これは焼成時にバラバラに窯詰めした棺と蓋の組み合わせを識別するためだと考えられる。甕棺は、火葬が始まるまで利用されていた。

陶製墓碑

甕　棺

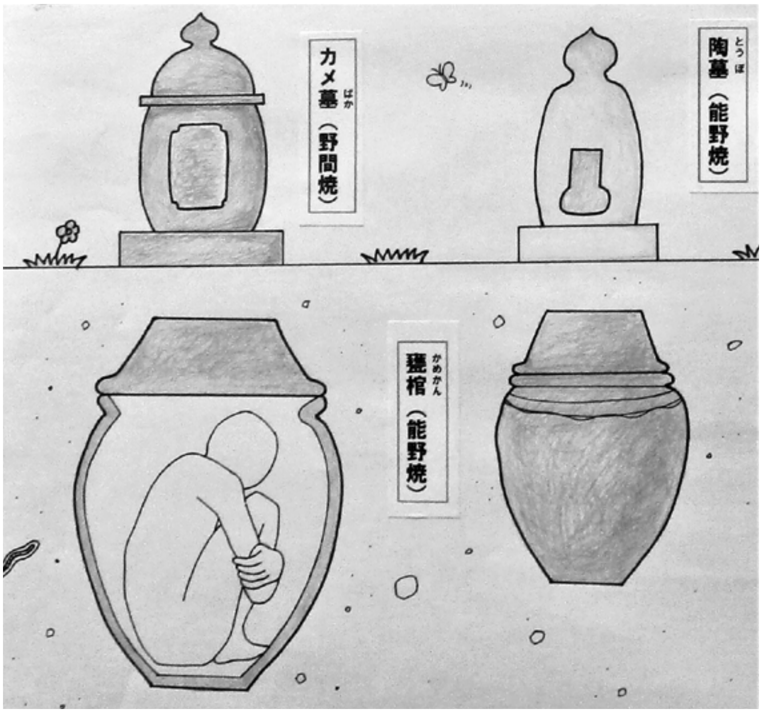



図８−32　陶墓・カメ墓・甕棺使用イメージ図

### 能野焼の終焉（しゅうえん）

明治二十年代になると、海上交通の発達に伴い島外から様々な商品が流入するようになり、島内の日用雑器を一手に担ってきた能野焼も転機を迎えた。

こうした時流の変化を受け、能野の窯元は、明治三

能野焼を終焉に導いた土管（住吉窯　山本達也氏所蔵）

十三年頃から始まった「種子島縦貫道路工事」に伴う排水用の土管制作を請け負うことになる。従来の窯のままでは不都合であったことから、一部窯の改造をするなどして土管制作に窯存続の命運を賭けた。しかし、道路工事の終了とともに土管の需要もなくなり、明治三十五年に閉窯に追い込まれた。故・山本秀雄氏（能野出身）は著書の中で、「能野などむしろ雑器の伝統を守っていたならば、（中略）生き残る道もあったのではなかったかと」とその幕切れを惜しんでいる（山本　一九七九）。

## 三　種子島陶芸史の新たな一歩　種子島焼

明治三十五年に能野焼の歴史は幕を閉じたが、昭和四十年代になり、「能野焼を復興させよう」という機運が高まった。その活動の中心人物であった山本秀雄が、日本陶磁器界の重鎮、小山冨士夫に相談。その後、小山の紹介により、唐津焼窯元の五男であった中里隆を陶工として迎え、昭和四十六年西之表市古園に「種子島焼」が誕生した。

種子島焼は、能野焼とは系統を異にするが、種子島における陶芸の歴史において、非常に大きな出来事である。その後、種子島にも再び窯元が増え、現在に至る。

種子島焼誕生に大きな役割を果たした二人の略歴を紹介する。

### 小山冨士夫

陶磁器研究家・陶芸家

一九〇〇年　岡山県倉敷市玉島に生まれる

一九二三年　東京商科大学（現・一橋大学）中退

一九三〇年　東洋陶磁研究所所員となる

一九四一年　東京帝室博物館（現・東京国立博物館）勤務。中国河北省で「幻の窯」と言われた宋代の白磁の窯跡を発見。文化財保護委員会調査官としても活躍

一九七〇年　能野焼復活の相談を受け、唐津焼の中里隆を

紹介。鎌倉の自宅に種子島の土を取り寄せ、自ら試作を重ねた

一九七一年　「種子島焼」誕生

一九七二年　岐阜県土岐市に「花の木窯」を開き、作陶

一九七三年　東洋陶磁学会設立、委員長就任

一九七五年　自宅にて没す　享年七六歳

主な著書

『薩摩焼の研究』（一九四一年）、『宋磁』（一九四三年）、『日本美術大系　六巻　陶芸』（一九六〇年）、『中国名陶百選』（一九六〇年）、『日本陶磁総覧』（一九六九年）他多数。

**中里隆**

陶芸家

一九三七年　唐津焼一二代（無庵）中里太郎右衛門の五男として生まれる

一九五九年　京都市立工芸指導所に学ぶ

一九六〇年　京都清水坂・松風栄一に入門

一九六一年　佐賀県立窯業試験所で井上萬二（のちに人間国宝）らに轆轤（ろくろ）の指導を受ける。

一九六一年　朝日新聞社主催第一〇回現代日本陶芸展にて、第一席受賞

一九六七年　アメリカ、欧州、中近東、東南アジア、韓国などを一年間旅行

一九七一年　小山冨士夫の推薦により、種子島へ渡島。西之表市古園に築窯し、種子島焼を始める。九月、日本橋三越及び大阪高島屋にて種子島焼として初めての個展を開催、以降、各地にて個展を開催する

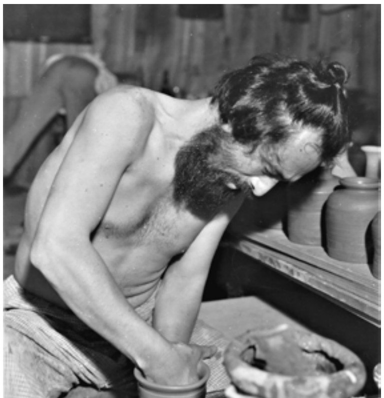
一九七四年　種子島を引き上げ、唐津に帰る。唐津市見借に窯を築き、唐津南蛮等を主として作る

一九七四年　小山冨士夫より隆太窯と命名

一九八五年　日本陶磁協会主催の現代陶芸選抜展賞を受賞

現　在　長男・中里太亀と共に隆太窯にて作陶活動を行う

現在種子島で作陶をされている窯元は九つあり、そのうち住吉には三つがある。それぞれの作風を醸し出しながら、根源にある能野焼の風味を継承している。



中里隆

## 第五節　移　住

住吉校区における移住は、市内の他の校区に比較すると小規模であり、移住の記念碑等も建立されていない。『甑島から種子島移住　野木之平百年』（江口　一九八六）によれば、明治十九年（一八八六）～二十年の二カ年で形之山集落に一二戸の甑島住民が移住した。

『種子島研究』一九号（一九八一）に入植時の事情を聞取りしたものがまとめられている。

甑島が大飢饉のために、手打の平野・園山・榎本・倉元・瀬々之浦の山下さんらの計五戸は、住吉形之山の通称「びしゃごまつ」（塩屋牧）に移って来た。その地は国有地で、原野に移住掘っ建て長屋が一軒立っていた。その当時の生活は、言葉ではあらわせないものであった。

二・三年して、現在の形之山の部落の地に移って来た。すでにその地には、在住の戸として鮫島・田之上・榎本・遠藤・深田があった。移住者は各自が、それぞれの相談相手を在住の人に求めた。その人を親分と呼び、たとえば平野さんは、田之上さんを親分とした。移住者は生活に困った時には親分に助けてもらい、親分が忙しい時には手伝いに行ったりした。

そこでの生活もまた苦しかった。移住者の子供は、移住美ということで悔しい思いをしたこともあった。しかしそのことは、逆に移住民にやる気を起させてくれた。

その後、榎本・倉元さんらは他の地に移って行ったが、またそれとは反対に当房さん、戦後に和田・小田原・大里・荒木・兼下さんらが新しく移って来た。部落の戸数はわずかながらもふえて来ているが、そのことは在住の人々の親切さと移住者の努力によるものであろう。

話者　平野新之烝（生年　明治三六　年齢　七八）

## 第六節　戦争と疎開

太平洋戦争の頃、住吉にも機銃掃射戦闘機が現れて田畑や牛舎構わず撃っていった。当時の子どもたちは戦争の実感が全くなく、米軍が放つ機銃の薬莢を遊びに使おうと無邪気に拾っていた。疎開が決まったときも住吉の土地から出たことがないため、島を出て船や機関車に乗れるという喜びで両手を挙げて校庭を走り回ったという。

しかし、疎開先で待っていたのは「ひもじい」暮らしだった。住吉小学校の子どもたちは本城という土地へ疎開したが、飢えとの戦いを余儀なくされた。食事には薄いみそ汁（具は里芋のかけらひとつ）や塩練りデンプン、バラカス（大豆油の絞り滓、本来は牛のエサ）などしか出なかった。飢えと家恋しさで毎晩のように泣いていたという。これは疎開児童のよくある話である。住吉では、大人たちが荒波超えて漁船で子どもたちを迎えに行ったという、ほかの校区にはない特別な物語があった。

疎開児童を迎えに行った住吉の人々の思いは、『創立百周年記念誌』に寄せられた高橋甚吉氏の「疎開児童を迎えに行って」という文書に赤裸々に綴られている。そのまま全文を引用する。

> 太平洋戦争の末期、昭和二十年六月、沖縄も既に米軍の手中に落ち勢を得た米軍は基地を沖縄に得て連日Ｂ29の爆撃機で本土急襲を敢行、軍部は本土決戦の様相を呈し学童を強制疎開せしめた。無事であれば親心、そして八月空襲におびやかせながら水稲の収穫、人手不足と手入れ不足等あって収穫は半減された。
>
> 八月十五日、終戦の大詔が下り昨日まではびくびくして野良仕事も出来なかったが、戦争は終わったそうだ。そういえばＢ29が飛ばないようになった。半信半疑であった。
>
> そして時は流れて九月に入り一般父兄の頭にあるのは疎開児童の引き取りであった。風の便りによれば食べ物も十分でなく栄養失調ともっぱらの話、部落毎に引取りの相談会が催された。校長池上先生はしばらく時期を待ったら汽船が通うようになるだろう、それ迄待ったらとのご意見。
>
> 終戦直後のことで当時二隻の船はそれぞれ空襲に遭い、八重嶽丸は湾内で座礁、どうにか橘丸は健在であったようだが終戦のどさくさで就航の見通しはつかず、浜之町の漁船を借りたらどうか意見荒号たるものであった。このままで長くなると子供が可哀想だ。一刻も早く親としての切ない思いであった。
>
> 二回三回とその相談会が催され父兄側の意見が強く学校側の意見は馬耳東風であった。
>
> 相談はまとまった。小さな漁船だけに各部落となると八双の船を用意しなければならない。各部落の代表者が浜の船主の処に相談に行った。それぞれ相談が出来たらしい。
>
> 私共は中之町であるから山下計左吉氏の船に当たり、それぞれ準備に取り掛かった。新米が取れた直後であるから

各戸から米二升の割当があり、それに軍部お下がりの乾パン、粉みそ、粉醤油、野菜等、大きな鍋もいるとの事、砂糖鍋を二つ準備する。当時の船は焼玉エンジンで重油を使い、その油も或る人が軍部からのお下がりを得、そして行く人の人選に入り、部落ごとに三、四人宛が決まり、私もその一人となった。さて準備満帆出来たものの折悪しく台風に見舞われ引取りの話も一応消えた姿になり、やがて台風もおさまり又そろそろ出発の話が出てきた。

船待ち等の相談の結果、日を決定、朝五時出港とのこと薄明かりの夜明けを待って部落民父兄が海岸に勢揃いした。荷物を積み込むことと見送りの為であった。一双二双と続いて朝焼けの空にエンジンがポンポンと響き威勢よい船出である。

「頼むからなあ」タオルを振るもの、顔に手を当てているもの、船は続いて海原に出た。

佐多岬を目ざして、馬毛島の北端を過ぎた頃から台風の余波もあって大波になった。同時出港した船は速い船、遅い船と速力が大きく違ってきた。何時の間にか離ればなれになり自分だけの船が走っているようである。

馬毛島と岬の中間くらいが一番難所といわれた。次々と大波が襲ってくる。その度に船人等が「ヨイショ」と声を掛け、波を乗り切った。来なければよかった云々・・・。そこらあたり僚船は見つからない。我々は船尾にうずくまり運を天にまかせた。どうにか大波を乗り越え大隅半島の方に近づいた。

やれやれよかった。ところで少し波もおさまりホロ引きで二匹の鰹を釣った。いよいよ岬、又も大波だった。かろうじて通過、湾内に入り鰹のシャシミ（刺身）とニギリの昼食をすませた。それからは波もおだやか、左右の風景を眺めながら走る。台風の後とあって何やら漂流物が航行を阻害した。時間も大分過ぎ桜島を右に見て、家から持ってきた粗末な地図を広げ、隼人の浜之市港に向かった。

小島を廻りいよいよ隼人の浜之市港へ入港、適当な船の合間を見て錨をおろした。宿の選定である誰かの知人を頼りに宿泊の段取りになった。料亭の後らしい。その翌日いよいよ伊佐方面に出発しなければならないが、復員かれこれで汽車の切符は買えないとのこと。相談の結果、米を五升駅員にくれて切符はどうにか手に入れた。夜が明け九時頃であろうか、駅に行って見たら誰かが住吉校の生徒は今の汽車に乗っているとのこと、急いで出てみるとその通りだ。親も子も一斉に目が合った。よかった。涙が先に出、又もと顔を合わせようもなかった。

鹿児島駅までは行かれない、竜ヶ水終駅との事、我々は船だから竜ヶ水まで船を廻した。焼け野が原の鹿児島市、どうにか洲崎小学校の焼け残りの校舎に仮泊することが出来た。

持ってきた砂糖鍋で飯炊き、それぞれニギリにして食べさせた。栄養も悪くなり多くの子供が痩せているようだった。吹出物等の生徒もいた。一泊して翌朝、部落別の船に乗り込んだ。生徒もだが、夜具・見回り品等もある。それらを船べりに積み最中に子供を乗せた。

いよいよ鹿児島港を後に出発だ。湾内は穏やかなので子供のにぎやかな話し声で花を咲かせた。知林（知林ヶ島：ちりんがしま　指宿）を過ぎるとやや波が大きくなってきた。子供の話し声が止んだ。我々は四十人の生命をこの小さな船に託しているのである。

立目岬を過ぎるといよいよ大波と変わってきた。船首を軽くしなければならないのに、それだけの人が乗り荷物を積んだのだから船足が入りトビウオを満載したような姿になった。手をやると海水はすぐ近くだった。我々は不安になり先を危うんだ。僚船は後に続いていた。いよいよ三角波といわれる佐多岬にかかった。船は木の葉のようだ。次々と大波が襲ってくる、しぶきで布団を濡らす。一寸一寸船足が入るような感じだった。僚船の一双は灯台の沖の方へ向かった。船頭により見方が違うのだろう。我々は灯台のすぐ近くを通った。波のノーマを見てエンジンを早めたりスローしたりした。難所と言われた岬をようやく廻った。この分では種子島の方には行けそうもない、大泊港に入港することにした。公民館を借用一夜の仮泊をなした。

翌朝、出航だ。昨日よりやや波もおさまり天候も良いようだ。そして難航に難航を重ね午後二時過ぎ、なつかしいふるさと住吉港に着いた。手を振って帰省を喜ぶ者、相抱く者、涙を流し再会を喜ぶ者、海岸は黒山のような出迎え。一人の不幸児を除き無事帰島、校長のねぎらいの「ことば」もあり、それぞれなつかしい家路に急いだ。

この疎開にて、たった一人、当時小学二年生だった深川の上妻幸次郎氏が帰島直前に赤痢で亡くなった。『創立百周年記念誌』に戦争体験を寄稿した人は皆、心から冥福を祈ると綴っている。

戦争の名残　防空壕（里之町）

# 第七節　人物

## 山本秀雄

大正十三年（一九二四）～平成二十四年（二〇一二）

住吉能野出身の郷土史家である。種子島・屋久島に関する膨大な資料を収集し、『種子島・屋久島関係文献資料目録』『屋久島歴史小年表』を作成した。故郷のためにとひときわ尽力したのは、能野焼の再興を目指した種子島焼開窯と、農家の安定収入を狙ったガジュツ栽培の普及である。

住吉能野に生まれ育った山本秀雄は一七歳で海軍に志願する。志願理由は「海軍なら外国にたくさん行くことができるから」であった。海軍学校卒業後すぐにアリューシャン海域作戦に参加、その後三年間南太平洋全戦域を転戦したが、昭和十九年（一九四四）、両肺に被弾するという重傷を負い帰国、奇跡的に一命を取り留めた。終戦後帰郷し、熊毛支庁に臨時職員として勤務した。

昭和二十四～二十六年まで西之表市青年団長、熊毛郡連合青年団長を務めていた時に、屋久島宮浦出身の岩川與助代議士に見込まれ、秘書となって上京する。二〇年間、代議士秘書という立場を生かして多種多様な人脈を築き、故郷のために何ができるかを模索していた。

昭和三十八年に出会った杉村勇造（当時東京国立博物館図書室長）に種子島の魅力を知ってもらおうと能野焼を紹介、二年後の同四十年には鎌倉にて日本陶磁器学者であり陶芸家の小山冨士夫に引き合わせてもらい、能野焼再興への意気込みを語った。その後小山冨士夫を種子島に招待、能野焼の持つ風合いを陶芸品としての「種子島焼」として昇華させることに思い至った小山冨士夫は、作陶と窯作りの指導者として唐津焼の陶芸家である中里隆を招致しようと決断した。当時の西之表市長井元正流や種子島時哲を直接中里隆の元へ送り、種子島での開窯を促した。

山本秀雄

代議士秘書時代の山本秀雄

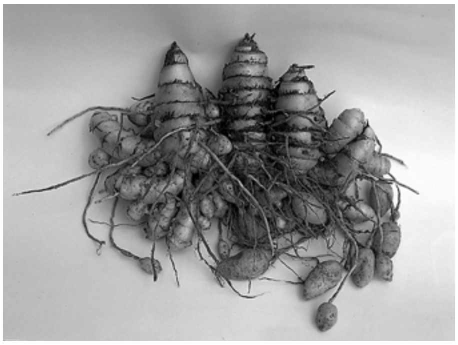
昭和四十六年、種子島窯の窯開きに参加した山本秀雄は、そのときすでに胃腸薬「恵命我神散」の創業者である柴 昌範（屋久島出身）と出会い、柴の「地元に安定した産業を　自分よりはまず人を」という利他の信念に傾倒し、老舗恵命堂の取締役

となっていた。

生薬ガジュツは熱帯アジアを原産地とするショウガ科植物であり寒冷に弱く、種子島・屋久島は北限の栽培地である。厳しい成育条件の中で育った屋久島・種子島産のガジュツは中国産と比べて精油が多く、薬として効果の高い成分が多く含まれていた。屋久島工場長に就任した山本秀雄は、種子島・屋久島に乾燥工場を建設、地元の雇用にも貢献する。

ガジュツはサトウキビと同時期の二～三月に収穫するが、収穫後に必要なヒゲ取り作業は室内で座ったままできるので、寒い時期でも高齢者にもできるという触れ込みで農家へ栽培を普及させていった。作物は市場には行かず、すべて恵命堂へ納入されるため安定した収入となった。

唐津にて　中里隆と山本秀雄


ガジュツ根茎　（株）恵命堂提供

平成十二年、七六歳のときには熱望され、上屋久町歴史民俗資料館長に就任し、種子島に帰るまでの約八年間、屋久島の歴史・民俗の研究に尽力した。

# 第八節　年中行事・郷土芸能

## 一　年中行事

ほかの校区との差異が見られるのは船祝い、七種、このみやじょう、なかよし相撲あたりだろうか。

### 一　月

一日　元旦祭（住吉神社・形之山神社）／二日　舟祝い／七日　七種（ななくさ）／九日　住吉小学校創立記念日／十四日　このみやじょう（蚕の宮城）

### 五　月

初旬　星原小学校と仲良し相撲

### 七　月

六月灯

### 八　月

十三日から十五日　盆

### 九　月

十五夜

### 九月～十月

各神社にて願成就（住吉神社、深川神社では奉納踊り）

### 十　月

校区運動会

### 十二月

三十一日　大祓式　除夜祭

### 舟祝い

正月二日各舟主が舟の中央に舟霊様をまつり、漁民の安泰と豊漁を祈願する。浜之町では、漁師がべんざしの家に集まって行っていたが、現在は公民館にて行われる。その折、皆で舟祝いの唄を歌うが、なかでも「つなざらえ」の唄は、全国でも五指の内に数えられる気品高いものである。

つなざらえ
ともへ、ともへ、ともに

浜之町の曼荼羅

船祝いの様子（押川マミ氏提供）

申す。なんと承りましょう。
時ころ潮も、よいそうにござる。おもては錨に向きまあす。
それ一段ようござりましょう。
ヤーゾーヤーゾーヤーゾー
イーゾーイーゾーイーゾー
エーゾーエーゾーエーゾー
とーりかじ。
おっとう。
おもーかじ。
おっとう。
今のかーじ、とって候。
やらめでたいな、五葉（御代）は。めでたの若、枝も栄（は）
ゆ、ゆーる、葉も茂る。
なおもめでたいなー、じょうげ、めでたのホイヤホー。
思う港に、トンドに、そよそよと、そよにそよそよと。
吹いた風に、乗りだーす。
それもイヤー、船頭衆、衆のしあわせー。
嘉例（かれ）よしの船に灘よしを、乗せて、船頭から
船中（せんちゅう）衆、皆、嘉例よしヤナア。

## 七　種

その年に数え七歳になる子どもに晴着を着せ、神社で神様に無事七つを迎えたことを感謝しつつその晴れ姿をお披露目し、これからの健やかな成長を祈願する。昔はお椀を持って親戚や近所の家々を回り、小豆粥を少しずつ貰って食べていたという。現在は全国的な風習と混合して、各家庭で七草粥やご馳走を食べてお祝いしている。

### このみやじょう（蚕之宮城）

養蚕の豊穣を祝う行事である。養蚕は文政元年（一八一八）に種子島へ伝わり、のち全島へ広がり、桑の木の栽培とお蚕様の世話は庶民にとって必須となった。現在住吉校区に養蚕農家はないが、盛んだった頃の行事が伝統として現在もなお残っている。

一月十四日の午後遅く（一六時頃）から小学生以下の子等が各家の門口で、てくてく棒と呼ばれる木の棒を打ち下ろしながら決まり文句を唱えて回る。

各家庭の門や軒先には、コヤスギの小枝に紅白の餅を刺した物が飾られ、子どもたちが回収していく。餅は公民館でぜんざいにして食べ、残りは分配される。最近では餅のほかにお菓子やジュースを置

このみやじょうの様子

いておく家庭もある。

てくてく棒は「たぶの木（イヌビワ）」の皮を剥ぎ、その皮を螺旋状に巻き付けて火の上で炙り、煤模様を付ける。昭和三十年代頃までは男児のみで行われていたそうだが、次第に女児も参加するようになった。

「蚕の宮城」の節は住吉校区内にても各地域によって文言に多少の違いがある。深川の文句が一番長文であるので紹介する。

祝い申す　これから申す　門（かど）から申す
この家は　裕福まいの家と見かけ申す
まして　この家は祝うておじゃるどうから祝い申す　祝い申す
さいとこ　さいとこ
九十九階のこのみやじょうの
ますます先に　綾をはえて　錦を広げ
やーら　ランラン
とくとうませて　これより東の　浅びらの峠の
ケンケン鳥のメン鳥の　右の織りばね　左のかざぎり
おっとり合わせて　ひとがねすくえば　一千枚もすくう
ふたがねすくえば　二千枚もすくう
三千枚のこがねをよせあつめよ
ありごになるときゃ　ありがとと申す
つるごになるときゃ　はじめをめいす
ふしごになるときゃ　あまかもきらわず　つゆかもきらわず
赤まゆ　白まゆ　かかせたもーれ
そのまゆの固さは　あんま川原の石よりも　かとうござーる
このみやじょうのはるごうまか　勇ごとくに　夢にみてさえ
ものゆうきもうのよ　申すはいはいは　じょうのこまかよ
ららん　ランラン
ははじょうさまかよ　むすめじょうかよ
ららん　ランラン
今日のお祝い　お米やれ

## 二　郷土芸能

### 願成就

住吉神社は十月二十三日、深川神社は二十四日が願成就であり、源太郎踊、めん踊が奉納される。

### 源太郎踊

いつ頃、誰によって住吉に伝えられたかはっきりしないが、歌詞や踊りからみて室町時代から江戸時代初期にかけて種子島に伝わったと推測でき、別系統の太鼓踊りの影響

源太郎踊

も受けている。

七節からなる歌詞はそれぞれ独立しており、それに伴い隊形・楽拍子等が多様に変化していく。

### めん踊

古くから面をかぶる踊りはあったようだが、江戸時代初期頃伝来した「ひょうたん踊り」と合わさって、独特の「めん踊」ができたと伝えられる。この系統の踊りは、島内では一般に「ひょうたん踊り」と呼び、数カ所で見られるが、手作りの面をかぶるのは深川だけである。猿役は世襲制で、猿役の家の長男が継承する。

めん踊

めん踊で使用する面

## 第九節　伝　説

### 深川の大石

深川の海岸、国道沿いに高さ五メートルの大岩があり、その南面には「慶安五壬辰春時正月、南無妙法蓮華経、沙門日逵拝」と大きな立派な文字が彫刻されている。慶安五年とは一六五二年で、三五〇年以上前のものである。大きさ・立派さ・古さで、このような碑文は種子島でこれ以上のものはない。

深川の人たちは大石様と呼んで小石祠も祀っている。しかし大石様の由来は数多く、身分差から心中した男女を供養したとか、本村から来た男が夜遊びし過ぎて深川の若い衆と喧嘩して殺されたため供養したとか、布教に来た日蓮宗の坊さんが南種子から来て深川の一族に妨害されて殺されたとか、とにかくあの場所で人が多く死んだらしい。一番有力な説は、掟破りで琉球に流された罪人が赦されて島間に上陸したものの、赤尾木の人々に会わす顔がないと深川の大石の

深川の大石

所で切腹した。それ以来、大石の所に化け物が出るといわれたので坊さんが題目を刻んで供養した、というものである。

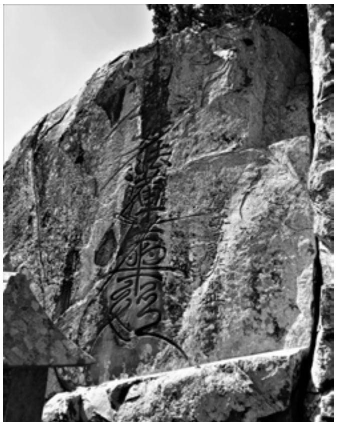
深川在住の人に限らず、現在でも大石様の前を車で通過する時は背筋が凍るという人が少なくない。大石様の北と南には二つの川が流れているが、そのどちらかを渡るときに特にゾクゾクするそうだ。

民俗学者である下野敏見は、「大石のところで人が不自然な死に方をしたことは何百年の間で何回か有り、その遠い記憶が人々の心に今なお微かに尾を引いて残ったが、最も大事なのはそうした人民の伝承や怪異への不安を取り除くべく、南無妙法蓮華経の法華題目を彫刻し、祈祷し同時にそれによって法華功徳をほどこし布教した当時の種子島法華宗の布教の見事さ、上手さに注目すべきである」と『西之表市の伝説』に記した。深川の集落民は全て神道であるが、深川神社の破魔、六月灯、願成就の祭典日同日、大石様前での法要を欠かさない。

## 大石に泥を塗る

明治元年（一八六八）、廃仏毀釈の際、深川集落民は全て神道に改宗した。仏法を廃したその日に、深川の大石の文字を集落民が泥を塗って消した。しかしその晩、大雨が降って泥をすっかり洗い流してしまった。そこで「これは何かのたたりじゃ」と言って、そのままにしていたそうだ。

廃仏毀釈の際に、大切な寺を廃したり、墓石から法名を削り取ってしまった事例が多く見られるなか、大石の御題目に「泥を塗る」だけで済ませた深川の人に後世の人間は感謝すべきである。大切な文化遺産を護ってくれていたのだ。



大石に刻まれた題目

## 与次が瀬

与次が瀬という名前の由来について、『懐中島記』に、次のような記述がある。

世に伝わっている話によると、いつの時代かよくわかっていないが、この住吉の浦に与次という漁師がいた。ある時、彼は海底から一つの鐘を曳き上げた。人々はこれを不思議がって見た。与次はその鐘を瀬の上に置いた。そして与次が言うには、この海底にはもう一つ鐘がある。それを引き上げるのは難しくない。だ

住吉灯台より与次が瀬を臨む

からしばらく待てと言って海に入ったが、その後彼は再び姿を見せなかった。それで人々は、彼は竜宮に行ったのだと噂した。そして、その鐘を方之山（型之山）八幡宮に寄進した。その後、全島改宗の折、竜華山（大会寺）に奉納した。この鐘は、わが島の珍宝となった。世にも珍しいことではないか。ところがいつのまにか腐蝕して、しだいに音が出なくなった。それで僧侶たちは、この状態を嘆いて神仏に祈祷してみたが何の効果も無く、結局廃物となってしまった。後世、その瀬を「与次が瀬」と名付けたということである。

住吉の古老が昭和四十年（一九六五）に語った話では、住吉灯台の先にある与次が瀬では昔から船が沈んでおり、ここで沈んだ船の中に鐘を二つ積んでいたものがあって、一つは引き上げることができたが二つめを引き上げるときに一人の人が鐘に被さって死んだ、という。

仏峰の石塔

## 仏　峰

住吉志和野地区の県道のすぐ上にホトケミネという自然石の石が立っている。ここには何百年も前、仏を埋めたという。供養祭りといって昔は住吉中で祀ったが、現在は一月十五日に集落中でオセンマーとオミキをもっていく。寺の師匠さんが来て塔婆を立てる。

## 能野浜の刑場

現在は高松と呼ばれる砂地を昭和四十年代に掘削したところ、人骨と供養のための盃などが出た。『種子島家譜』にも、

○宝暦三年（一七五三）十月廿七日、中之村の百姓七助と西之表村の百姓平助を能野浜で磔（はりつけ）にす

○天明六年（一七八六）二月廿九日、中之村の善五郎を能野浜にて磔にす

○弘化二年（一八四五）五月廿五日、妙泰寺番僧白眼院を能野浜に磔す

などの記載があり、能野浜で磔にされた罪人がいた。この時代の磔刑は生きたまま磔にして数日放置、とどめを刺した後に再放置、しばらくして穴の中に放り込み、犬や鳥に屠らせるという方法だった。磔だけではなく、さ

能　野　浜

らし首も行われていた記録がある。地元民は、潮目が危険だということと、以前は近くに屎尿処理場があったため、この浜で泳ごうとはしなかった。

現在は、海岸線が整備されたこともあり、良い波が来るとサーフィンを楽しむ人々で賑わっている。夏の海の透き通るような青さと夕陽の美しさを見ようと観光客も多く訪れている。

## ハタモーリ

下野敏見著『タネガシマ風物誌』にハタモーリについての記述があるので引用する。

深川の海側に小高い丘（岩山）がある。大昔、島間に若い男の神様がいた。ふと見るとかなたに灯りが一つ見えた。神様は灯りを目指して海沿いに砂浜を歩いた。何里も歩いてやっと灯りのそばにたどりついた。小高い丘の上で一人の女神がハタを一心に織っていた。

「お前はどうしてここでハタを織るのか」と聞くと「神であるからここにいてハタを織るところです」と答えた。

「それなら私も神じゃから、お前と夫婦になろうじゃないか」と言って二人は夫婦になった。（中略）この小高い丘こそハタモーリという。ハタ織りの転化か。ハタモーリを住吉の人はホシともいう。星のように光って見えるからだそうだ。住吉の人が沖へ出たら、ホシを目当てに漕いでくればリ住吉に間違いない。しかし怪談の話もある。大昔、ハタモーリの下を通ると美しい女がハタを一人でカッタンキッタンと織っていた。

次の瞬間その姿はかき消えてしまった。通行人は恐ろしくなって急いでそこを過ぎた。今は非常に寂しい所だと言われ、ヌレヨメ女が出るともいわれている。

ハタモーリ（字名は星ヶ崎）

# 第一〇節　神社仏閣、石塔

## 一　神　社

### 住吉神社（住吉御山鎮座）

祭神　底筒男命・中筒男命・表筒男命、大綿津見神

島津藩の国老職も務めていた一八代久時は、その間、一〇回以上も上京している。参勤交代に随行する長、旅家老の役目も務めた。家臣団を引き連れての上京、その道中はほとんどが海上である。その苦労は大変なものだった。その旅の途中で摂州（現大阪）住吉神社を参拝。海上安全・武運長久の神様に大いに崇敬、領土守護のため家臣に命じ、「海浜に接し風光に富み、且つ神聖なる霊境」を探し、現在の鎮座地に御分霊を勧請したと言われている。旧社格は村社である。

**住吉神社沿革**

・創立　元禄七年（一六九四）
・石灯籠及び狛犬献上　寛政元年（一七八九）
・社殿改築　本殿　明治十一年（一八七八）　拝殿　明治十二年
・石階参道工事　明治二十七年
・手水岩曳上げ　明治二十七年
・吹上神社合祀（大綿津見神）　明治三十八年
・吉野杉造林　明治四十二年（昭和六年、シロアリ害と旱魃により枯れてしまい、伐採。イヌマキ・ヒノキ・クスを植林予定と記録にあるも現在は竹林）
・鳥居改築　御池開設　昭和三年（一九二八）
・社殿改築　昭和八年
・鳥居改築（鉄筋コンクリート製）　南種子村下中の中里畡助氏奉納　昭和十二年
・松千本造林　昭和四十三年　明治一〇〇年記念事業
・能野神社、形之山神社、深川神社を住吉神社の飛地境内神社として合併　昭和四十二年二月二十四日
・第二鳥居　長野勉氏寄付　昭和五十七年八月
・第一鳥居建設　平成二年（一九九〇）四月
・本殿修復・拝殿新築　平成五年（台風一三号猛威により倒壊したため）
・第三鳥居改築　老朽化と虫害により、霧島神宮より木材を賜り改築　令和四年（二〇二二）十月

図8－33を見ても、松が参道に沿い繁る様子がうかがえる。

住吉神社

図８－33　完成予想図

その上の拝殿本殿にも松林が広がっていたのだろう。見事な松林は、昭和四十年代に猛威を振るった松食い虫によって全滅した。種子島全土にその被害があったことは本当に無念である。国道沿いの第一鳥居をくぐり、棕櫚（しゅろ）が並んだ小川に沿って進むと、昭和十二年に建てられたコンクリート製の第二鳥居の先には明治二十七年に工事された一七〇段の石階参道がある。一段一段進むごとに御山の奥へ奥へと入り、途中の曲線で振り返ると僅かに森が開け、住吉港が見える。見上げると第三鳥居が待ち構えている。石段を登り切ると住吉神社の拝殿に迎えられ、右手には明治二十七年に曳き上げられた手水岩が有る。左手にはいつ頃からあるのか不明だが、古い手水岩があり、寛政元年（一七八九）に献上されたという石灯籠と狛犬は境内地の隅にひっそりと佇んでいる。拝殿の奥にさらに石階があり、二対の狛犬が本殿を護っている。その周囲は珊瑚石が緻密に積み上げられた石塀であり、真中に本殿が坐す。海上安全、武運長久の神であり、祓いの神である。

戦後、宗教法人となり経済的負担を強いられた住吉地区の神社は、村社である住吉神社を氏神として祀り、形之山神社、深川神社、能野神社が昭和四十二年に住吉神社の境内社（飛地境内社）となった。

境内社三社については昭和二十七年、宗教法人登記のための「神社明細書」に記載されていた由緒を原文のまま紹介する。

170段ある石階参道

古い灯籠と狛犬

## 形之山神社（住吉形之山鎮座）

由緒

創立年月日　不詳

古老の口碑に伝ふるところに依れば当社の御祭神は木花咲耶姫命、応神天皇を祭祀し、昔藤原代官此の島を治むる頃より代官上妻氏の分家山本家代々斎き奉りし神祠なり、与平、与衛門、戸左衛門等代々神田（葉山田）を耕耘すと謂ふ。又其の神の御分神馬毛島葉山神社を神渡しの為め祭典日に西風吹くところなど過去幾十年違ふことなきは又審議なりと怖せられ、又古来お産の守護神として霊験講顕なるが故に島民の信仰浅からざるものあり

木花咲耶姫命は燃える産屋の火中にもかかわらず無事に出産を果たした母として、応神天皇は神功皇后が海上にあったため一五カ月も出産を遅らせたのちに無事産まれた子として、安産の神様とされている。

形之山神社

鎌倉時代、種子島の地頭大浦口氏に代わって赴任し政務をとっていた上妻氏の氏神として祀られた八幡様である。ハヤマ様と呼ばれていたが、一一代種子島時氏の律宗から日蓮宗への全島の宗教改革の時期に海沿いの地へと移された。また馬毛島へも分霊され、馬毛島の葉山という地名はここからきている（「馬毛島葉山八幡宮縁起」による）。

海辺の地へ移された理由については、もともとは中・南種子へ通じる街道沿いにあったため、島主が形之山を通る際に下馬しないと神様のお咎めがあるといわれ難儀なので、街道から外れる海沿いへと移したというが、実際は種子島氏来島以前の代官の祀る神が崇敬されるのを快く思わなかったからともいわれる。『懐中島記』には、次のよう

拝殿内に並ぶ安産祈願、願成就の品々

境内から馬毛島を臨む

に記されている。

片之山八幡宮の跡は、坂の上、東の山中にあって、寺山と呼ばれている。昔は大きな社があって人々の尊崇を集めていたという

海沿いの地に建てられていた社殿は、平成二十四年の老朽化による社殿改築の際、『懐中島記』に記された本来の場所にならい、形之山公民館の上、スメ小屋（砂糖製造所）のあった山の中腹へと遷宮された。

現在の社殿からは馬毛島を臨むことができ、祭典の際に吹く西風をはっきりと感じられる。お産の神様として、現在も拝殿の中には安産祈願者の名前が書かれた白布や日の丸が並ぶ。無事出産を終えた後のお礼参りとして、よだれかけや小さな着物の型を奉納するのが習慣である。

## 深川神社（住吉深川鎮座）

祭神　豊受姫大神　瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）

由緒

口碑に伝わるところに依れば、後に岳陵を控え前方海に濱し小川の清流のほとりに古くより神祠ありて村人等此の処を御山添（おやまそえ）と称して崇敬し、参道を弘め神域を改善し神田を開き初穂を献じ、春秋の祭祀を厳修するに至れり、因みに本社の本殿は石堂なり。神域の清掃を為す役を社人と称へ、神田を耕作する役を当人と呼び、一ケ年を以て部落民互いに交代の慣習なり。

現在も社人、当人の役割は一年交代で深川集落民の務めである。

もともとは深川の上妻一家の氏神だったが、のち集落の氏神様となった。上妻一家は正月二日に系図祝いを開き、その際にこの神社にてお祓いを受けることが慣習である。

高さ約二メートル、島内一の大きさを誇る本殿の石堂は山川石で作られている。昔、上妻耕三という人物が山川（指宿）から石を切ってきて造ったもので、住吉の伊太郎の船で運んだという。

上妻一家系図祝い（昭和23年正月）

山川石の石祠

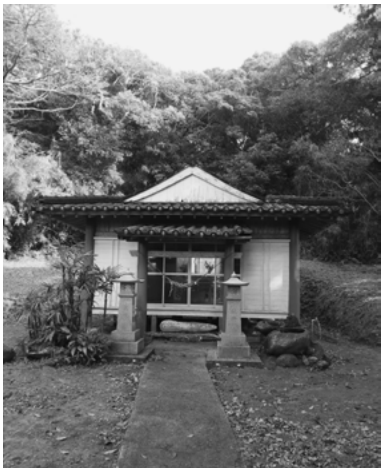
木造と見間違うような繊細な屋根の彫刻、台座も含めての面取り作業など緻密な手技が施されており、製作者の素晴らしい力量がうかがえる。

## 能野神社（住吉能野里鎮座）

祭神　大山祇神　武甕命　創立年不詳

由緒

往古能野の住人山本某なる者、葉山権現（現在の形之山神社）の斉司なりしが、能野村の氏神様として分霊を奉斎せんと神域を物色するに椎木山と称する樹木鬱蒼たる霊域あり。付近の住民尽力して此処に神祠を建立し椎木山神社と云ふ。その後、上能野、下能野の漁民等も共に崇敬するところとなり、能野神社と号するに至れり。



能野神社

通称「椎木神社」とも呼ばれ、上能野・下能野・能野里の三集落をまとめた大部落の氏神様として祀られている。通称については「立派な椎の木があったから」と言われたりもしていたが、その鎮座地がもともと「椎木山」という山だったからである。

祭神は大山祇神（おおやまつみのかみ）なので、もともと山だったということで合点がいく。さらに能野の土地全体から見て鬼門にあたる場所なので、後に戦力の強い建御雷命が合祀されたそうだ。

山本氏が形之山神社から分霊を考えていたという由緒からすると、木花咲耶姫命、応神天皇が祭神とされるべきところだが、霊場を前にして改め、大山祇神を祭神としたことに、自然への畏怖を感じる。

## エビス神社（住吉浜之町鎮座）

祭神　エビス神、大綿津見神　創立年不詳

海岸沿いのガジュマル防潮林の中に鎮座。祠が三つ連なっており、真ん中は昔から住吉浦の守護神として祀るエビス様、向かって左は馬毛島を基地としてトビウオ漁を創業していた時期に現地で奉祀されていたエビス様で、昭和五十五年に馬毛島が無人島となった際に遷座したものである。向かって右は住吉神社に合祀された吹上神社の大綿津

エビス神社

見神といわれており、「吹上エビス神社」とも呼ばれる。
　しかし、吹上神社については昭和四十年に行われた地元の聞き取り調査（種子島高等学校郷土研究部による）で複数の話が上がり、吹上神社の祭神は鸕鶿草葺不合尊（うがやふきあえずのみこと）で宮崎の鵜戸神宮から海を渡ってこの地に吹き上られ暫く此処へ滞在されたというものや、女の神様で土御門（つちみかど）の神様と昔から言われているなど、ほかにも里之町の長野家の氏神様で種子島家から預かったお曼荼羅を祀ったのだ、いや、神主は海神様と言っている、いや水神様だ、などなど、そのどれも信仰心から生まれた真実なのであろう。
　堤防沿いのガジュマルは、この浦の先祖が、昔、琉球貿易の際に持ち帰り移植したものと伝えられている。住吉の漁業従事者の守護神として、毎年七月に祭祀が執り行われる。

## 上能野神社（住吉上能野鎮座）

主祭神　天照大神

　上能野神社・下能野神社は、製塩を生業としていた塩釜の神様であり、天照大御神を主祭神とし、境内地には、牧の神・山の神・エビス神の祠がある。塩屋の記録は元禄二年（一六八九）に見られることから、創立はそれ以降ということになる。現在は地域の氏神様として集落自治会が神事を執り行う。
　上能野神社は、年貢の塩を生産していた上能野の塩釜神社である。広大な塩屋牧を与えられた上能野は、のちに能野焼が始められると、窯を焚く薪山としてさらに広く土地を与えられた。こうした牧の共有地も明治十二年の地租改正を機に私有地としての分配が行われて農地化が進んだが、それでも多くの山林原野が残されていた。塩屋牧は地元の人々に恩恵を与えて今日の繁栄の基礎となっている。境内の山際に祠が三つ並んでいて、中央にエビス神、右に山の神、左に牧の神を祀っている。

上能野神社

## 下能野神社（住吉下能野鎮座）

主祭神　天照大神

　下能野も昔からの製塩地であり年貢の塩を製産していた。境内地の山際にあるのは上能野神社と同じく、牧之神・エビス神・

下能野神社

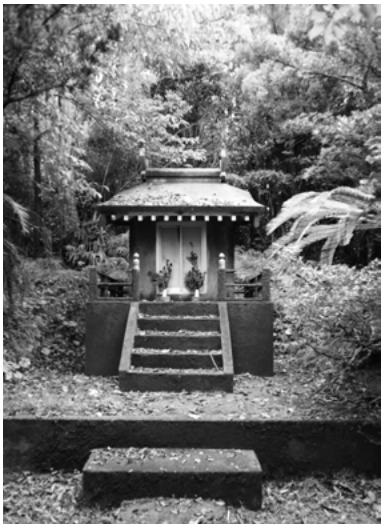
山の神が祀られているがこちらは左が山の神、右が牧之神である。下能野神社の牧之神は昔、人里から遠く離れた農作場の中にあったという。上能野神社との違いはカライモの神様も鎮座していることだ。種子島久基公をカライモの神様として「奉尊敬、究意院殿日等大居」と刻まれた自然石の碑が建っている。

### 牧の神（住吉里之町鎮座）

祭神　馬頭観音

住吉牧は種子島家直営の馬牧であったため、大変広大な山林・原野地を有していた。のちに牧は木材資源の供給地、農耕地となって、地元に多く恩恵を与えた。

神社境内には牧之碑が建てられて、時の経過を後世に伝えている。石碑については「住吉の石碑」において後述する。



牧の神

## 二　寺　院

### 本　立　寺

（法華宗本門流　能野里）

本尊　日蓮聖人

本源時末寺として創建されたものだがいつ頃に建てられたかは不明である。能野里の高台にあり、ちょうど能野神社と同列の位置にある。海まで集落を見渡すことができ、寺の一段下から山本家の本家、分家の順に段々と住宅が並ぶ。境内にはかなり古い自然石の石塔群があり、毎年盆には施餓鬼が行われる。

廃仏毀釈の際に廃寺となったが、昭和二十三年に松下智昭師によって再興され、地元信徒のよりどころとなった。現在は川迎の日典寺住職・山田師に継がれ

本　立　寺

本立寺の石塔群

ている。山田師の生誕地でもある。

## 本成寺

（本門法華宗　浜之町）

本尊　日蓮聖人　　大本山妙蓮寺末寺

昔は現在の小学校の敷地内にあり、古老たちは小学校の前を「寺ん前」と呼んでいた。江戸末期、西の大関と呼ばれた慈仙坊が住職であった。慈仙坊が相撲取りだったことは東の大関・川原嘉助（安城岡山神社に嘉助之碑と力石がある）との勝負に伝えられている。身の丈六尺（約一八一センチメートル）の大きなお坊さんだった。明治の廃仏毀釈によって廃寺となり、慈仙坊は住吉神社の神官へと転身、上妻直代宗春と名乗った。神仏習合の色濃い時代、住職と神官にさほど違いはなかったようだ。明治四十年に神官として、里之町の長野家の御曼荼羅を借り受けて、浜の漁師のために経を上げていたことが記録されている。

本成寺

長野家のお曼荼羅の裏には次のように記されている。

曩（さき）ニ天正十五年正月貸之ヲ浦人　故アツテ明治三十七年四月所有者ニ皈（かえ）リ再ビ同四十年新三月廿五日貸之ヲ浦人時ノ神官上妻直代ノ乞ニ因ル　所有者　長野村右衛門

長野家のお曼荼羅

また、昭和十七年に記された本成寺の沿革史には次のようにある。

抑（そもそも）住吉説教所は明治維新前本成寺と称し、本成寺は種子島島主十四代時堯公の建立なりしと謂伝う。「此の時禄三十石の寺高在りたりと云ふ」

本成寺は住吉居住民の菩提寺として尊信深く能野及び深川にも僧房（下寺の事）を持ちて隆昌を極めたりしも明治

本成寺の石塔群

初年廃仏き厄に遭い安置仏は地中に埋め其他仏具等は焼捨て時の本成寺跡は小学校となりたり、その後信仰の自由を許され明治十一年法華宗再興の為、京都尼ヶ崎両大本山第九十世管長小森日経上人種子島に下島し本宗復興を誘導せられたり。之に依り明治十四年旧信徒協議の上地下の御本尊を堀出し浜之町に細やかな寺を建てこれを安置す。感応院日幸師を信職とし是れより法華宗本説教所の再旧を見たり、依て深川僧房は消滅し能野房は独立す。

安置仏に時尭公の尊像と授与　種子島弾正左近太夫将監平時尭御曼荼羅一幅を祀る。日尭御本尊は十三年間地中に埋め居たりしを以て御本尊に毀損を生じたるため明治三十年新に本山より御本尊を迎え遷替を為したり。此の時より時尭公尊像及び御曼荼羅は焼却せり。大正五年十一月十日本堂増築　為之記録、昭和十七年二月二十日　住吉教会所主管者　深田清翁

（小松栄富『種子島「御船歌」の研究』昭和薬科大学紀要　人文・社会・自然(8)、1-24　一九七三）

## 三　石　碑

### 住吉神社前慰霊塔

住吉神社の第二鳥居横、御池跡の前に建立されており、十月二十三日の願成就祭後、戦没者遺族会によって慰霊祭が執り行われる。

碑文

日露戦争から太平洋戦争までの各戦役に従軍せられた軍人軍属の中不幸にして殉国の犠牲となった戦病死者の御霊に敬弔の意を表するために住吉区民の総意に基き労務の奉仕及び浄財の喜捨によって此の塔を建て御霊を永久に合祀します。

昭和二十七年七月八日

住吉神社前慰霊塔

### 飛魚船追悼之碑（浜之町本成寺内）

凡そ生を此の世に享くるもの、誰か明日の運命を予期せざらん。憶い起こせば、昭和二

飛魚船追悼之碑

十一年六月十八日の夕暮れ、飛魚運搬の皈路、馬毛島へ向け航行中、折からの豪雨は篠つくばかり、加ふるに雷鳴天を圧し、咫尺も弁ぜざれるに至れり。船は進路を誤り、遂に馬毛島西南約五哩の地点において転覆沈没す。二十有八名の乗員、互いに相呼び相助けつつ救いを求めたれど、暗夜と寒さと飢えの為、疲労困憊其の極に達し終いに力竭き果てて、只、運を天に任すに至れり。組合員一同八方捜査に努めたれど、その効空しく、杳として消息を断つに至る。同月二十日、都井岬沖合漂流中を救助せられたるも已に二十有一名の人々は海底の藻屑と消え去れり。悲しむべき哉。噫々（ああ）。浦の松風、音も咽ぶが如く、打寄する波の音、亦悲しみを語るが如し。組合員一同、茲に二十有一名の亡き霊の三星霜を経るにあたり、其の冥福を祈り、尚将来欺く如き禍根を生ぜしめざる為、碑を建て霊を慰むるなり。翼くは英霊永久に当浦を護り給え。

昭和二十三年三月十八日

## 下能野築港記念碑（下能野神社内）

当港は僅かに湾形を為したるい過ぎずして、しかも浦口に向かい、風浪動（やや）もすれば荒く、漁船碇泊又は避難に便する良港なきを恨むこと、茲に幾百年、爾来今日に及び、漁業発展に伴い、益々その必要を認め、浦人相謀り、莫大の費用をおしまず、遂に築港を決し、大正八年七月廿五日起工、其の埠頭の長さ五十四間、幅四間、工事費金二千九百九円五十銭を以て、同年十月四日竣工、自他の利便に供する浦人の熱誠と宿昔の希望を達成したるは、永世諼（わす）るべからざるものとす

大正八年拾月四日　廣瀬宗義謹誌

下能野築港紀念碑

## 馬毛島漁業権紀念碑（上能野神社境内）

本組合が馬毛島に於ける土地所有並に外魚鰒等入漁権獲得請願に除し支障起りたるも辛ふして解決　明治四十年五月一日入漁登録其の目的を達成したるは廣瀬宗義氏国上時興氏鮫島弥市氏の役援と共に當

馬毛島漁業権紀念碑

時の□?員及び協議員が一致協力したる効果あり以来□?次代員相継ぎ専を廣瀬氏指導下更に各種漁業権を得此れが統一を□?り船の組合の基礎をして安定今日あらしめたるは終始先輩諸氏の賜とす依て茲に碑石を建て裏面に初代役員以下順次各氏名を勒泳く之れを子孫に傳ふ

昭和十六年三月三日　能野浦漁業組合

（□?は判読できない字）

**オランダエンドウ発祥之碑（住吉神社第二鳥居左）**

ここ住吉の地に昭和三十三年西之表市農協技術員粟野初二君を軸として十数人のささやかな集いがえんどうの栽培を思いたちこれが端緒となり年を数える毎に生産次第にあがり今やえんどうの声価に天下に普ねく西之表市農業の王座を誇るにいたれり数年えんどうの栽培に限り無き情熱を傾注しきたれる住吉校区をはじめ西之表市農民各位の労苦をしのび更に今後の隆昌を祈念しつつこの碑を建つ

オランダエンドウ発祥之碑

昭和四十六年十月吉日　西之表市農業協同組合

西之表市園芸振興会

住吉校区園芸振興会

**牧之頌徳碑（里之町牧之神鳥居前）**

わが住吉牧場は明治初年種子島家直営の牧場廃止の時長野弥兵衛氏（実太郎曾祖父）が中心となり同志と謀り只ら要請の結果共有地として譲与されたものである。以来農馬を放牧して水田耕作の「ほいとう」に共同使後せしが偶々明治十二年地租改正による官有地編入に伴い下能野部落共有地の境界争いのため株主代表弥兵衛父子（弥八）田上市助氏は私事をかえりみず専心条理を尽し交渉を重ね遂に共有地の確保に成功したのであるが降って明治の中期に至り馬耕術の発達により「ほいとう」の自然消滅となるや牧畜を林野経営に改め保全育成に努め時代の推移と共に多少の消長は免れざりしも現実には宏大な財産を造成し多大の収益を納め組合員相謀り碑を建て

牧之頌徳碑

来歴を誌し創設者長野弥兵衛翁父子の功徳を偲び永く子孫に伝う

昭和四十六年十月三十日

住吉牧場組合一同組合代表　高橋甚吉

文と書　長野環

彫刻　若松友満

## 能野塩屋紀念碑（上能野公民館前）

四坊山冠嶽の山林は、元下能野塩屋所有地牧場地として、遠く元禄年間領主種子島家より恩賜を受けたるものなり。爾来幾百年間、牧畜に従事せしめらるると共に、一面、牧場地奉公として製塩業を為し、其の製塩を以て年貢とするの制を定められ、毎年拾石之を納付して怠らず。只維新に及びて自然消滅に属せしも、該土地は依然所有し来りしに、明治十二年地租改正の際、其の趣旨を誤解し、官有地に編入せられたるを憾むこと茲に十数年明治三十年に及び、政府比等の処分法を発布せらるるや下能野元塩屋人民と能野部落人民との間、幾回か凝議したる結果、其の引戻申請費用は能野部落の積立金を以て之に充て、引戻地は同部落の共有地となし、其の代償として下能野元塩屋人民へ金四百拾円付与することを協約成立す。是に於て選ばれたる引戻請願委員瀬崎周右衛門、鮫島弥市、西之表の羽生主右衛門及び山下彦太郎は、共に家事を顧みず寝食を忘れ死力を尽くして専心引戻手続を研究し、明治三十一年六月廿七日、下能野元塩屋人民名義を以て、農商務省へ請願するに際し、能く縁故を立証し錯誤を弁疏せし至誠を認められ、満五ヶ年を経て明治三十六年五月廿六日許可、尋いて同年七月、土地の引渡しを受くるに至れり。爰に於て部落人民一同始めて愁眉を開き欣喜指く処を知らざりき。此間、内は下能野元塩屋人民と能野部落人民間に於て衝突する処ありしも、西之表の三浦安能の調停に依りて和解し、外は住吉部落人民より種々の異議を唱へて官庁に申告すと雖も、能く之に勝へたる而已ならず、総支出実費金額二千四百六拾五円を算するに及び、辛くも之が支弁の方法を講じて誤らず、総べて満足に処理し得て、永久、能野部落人民の建築、薪炭材料に欠之を告げざるに到らしめたるは、実に鮫島弥市、瀬崎周右衛門、羽生主右

能野塩屋紀念碑

衛門の各委員及び山下彦太郎の力与(あづか)りて最も大なるも亦、下能野元塩屋人民の雅量と能野部落人民及び有志の試意と相候つて一致せし共力に因り目的を達成せし所以にして、其の功労は長へに此の不動山林地と共に滅す可からず。於是乎部落人民相謀り、碑石を建て而して其の来歴を誌して以て後人の紀念とす。

大正八年拾二月二十日　　広瀬宗義　謹誌

平山円　謹書

## 第一一節　年　表

| 和暦（西暦） | 住吉校区のできごと |
|---|---|
| 建久年間（一一九〇～九九） | 鎌倉幕府地頭大浦口氏の在島代官である上妻氏が、その後来島した種子島家に仕えることにより下賜された住吉村に居住し、形之山に八幡神の社宮を新造する |
| 元禄7年（一六九四） | 摂津の住吉神社の分霊を勧請して奉祀、神鏡一面、境内三万二五五〇坪 |
| **明　治** | |
| 7年（一八七四） | 七十三郷校の支校を置く |
| 8年（一八七五） | 住吉支校、第七十三郷校住吉分校となる |
| 19年（一八八六） | 深川に住吉小学校の分教場を置く |
| 21年（一八八八） | 能野に分教室、深川の分教場は分教室となる |
| 26年（一八九三） | 住吉校、尋常となる。能野、深川の分教室廃止 |
| **大　正** | |
| 12年（一九二三） | 住吉小学校々舎落成<br>能野に腸チフス発生、住吉、湊泊に伝染し、患者九〇人に達す（翌年収まる） |
| 13年（一九二四） | 住吉小学校々舎新築落成 |
| **昭　和** | |
| 10年（一九三五） | 住吉小学校の児童、夏休みを利用して谷山の長太郎焼を勉強、能野焼の復活を図る |
| 20年（一九四五） | 全島の小学校児童、二年から六年生全員、伊佐、大口方面に疎開を開始 |

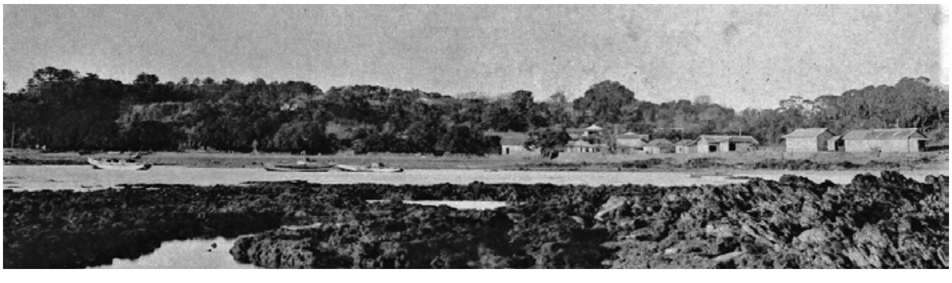
| 和暦（西暦） | 住吉校区のできごと |
| --- | --- |
| 21年（一九四六） | 住吉の山下万吉ほか二四人、午後七時頃、飛魚漁撈のため馬毛島に向け出発したが、豪雨のため方角をあやまり、燃料尽きて漂流中ついに顛覆、うち一七人が、六月二十日、宮崎県都井岬沖合で救助された |
| 22年（一九四七） | 住吉中学校開校、各高等科を中学校に移す |
| 23年（一九四八） | 住吉中学校本校舎六教室落成 |
| 31年（一九五六） | 住吉灯台竣工。無人式、八五〇〇燭光 |
| 38年（一九六三） | 住吉小学校講堂竣工<br>住吉河川港湾改修工事開始 |
| 39年（一九六四） | 「源太郎踊」市指定文化財、無形民俗文化財に指定 |
| 41年（一九六六） | 住吉上能野に屎尿処理場完成 |
| 43年（一九六八） | 住吉中学校給食実施<br>住吉浜之町「舟祝い唄」市無形文化財に指定<br>住吉漁港第二種漁港に指定される |
| 45年（一九七〇） | 「能野焼」を「種子島焼」として復活 |
| 46年（一九七一） | 住吉キャンプ場オープン<br>深川の「めん踊」県の無形文化財に指定 |
| 47年（一九七二） | ＮＨＫ「ふるさとの歌まつり」公開録画（住吉キャンプ場） |
| 49年（一九七四） | 住吉中学校校舎改築工事完成<br>住吉中学校新校舎完成 |
| 50年（一九七五） | 市立住吉保育所完成<br>市立住吉保育園　認可保育所となる |
| 52年（一九七七） | 市漁協、住吉漁具倉庫完成 |

| 和暦（西暦） | 住吉校区のできごと |
| --- | --- |
| 53年（一九七八） | 漁船漁具保全施設設置事業（上能野漁具倉庫）完成<br>下能野漁具倉庫（県単事業）完成 |
| 54年（一九七九） | 住吉小学校創立一〇〇周年記念式典 |
| 58年（一九八三） | 住吉小体育館落成 |
| 59年（一九八四） | 住吉消防分団車庫完成 |
| 60年（一九八五） | 西之表市農協住吉支所落成祝賀<br>南日本酪農協同株式会社種子島工場が住吉字千草野に移転決定 |
| 61年（一九八六） | 住吉分団に小型動力ポンプ付消防自動車を配備 |
| 63年（一九八八） | 住吉形之山（旧象化石）発掘調査 |
| **平成** | |
| 元年（一九八九） | 県営畑地帯総合土地改良事業（住吉地区）完成 |
| 21年（二〇〇九） | 住吉中学校閉校 |
| 24年（二〇一二） | 住吉保育園、社会福祉法人へ、住吉さくら保育園とし運営移管 |

暮らしの風景写真

昭和63年まであった寺ん前の家　土間に井戸とかまどがある

住吉港・丸木舟・防潮林（昭和38年頃）



住吉海岸より城の山を臨む